

第3部

1. 行動規範に則って、デカルトの前進

自分で決めたことを、自分で決めた方法論に従って実践するに際して、デカルトはある種の行動規範とも呼べるものを定めました。その意図は、「判断を保留せよ」との理性の命令に従っている間でも行為を停止することがないようにすることでした。それは、次の4項目から成っていました。

1) 自分の国の法律と慣習に従うこと

自分が共に生きなければならない人々のうちで、最も良識ある人たちが実際に広く承認している、極端からは最も遠い、一番穏健な意見に従って自分を導いていくことにしたということです。

デカルトは自分の意見を全て検討に付そうと思っていましたから、既にそれらを無に等しいものとみなし始めていました。そんな訳で、一番良識ある人たちの意見に従うのが最善と確信するに至ったのです。

そしてさらに、そういった人たちの意見が実際にどのようなものかを知るためには、彼らの言うことよりもむしろ行うことに注意すべきだと考えました。その理由は次のようなことでした。

- ・我々の道徳が退廃してくると、自分の信じることを全て言おうとする人はほとんどいなくなるし、多くの人には自分が何を信じているか自分でも分からなくなる。
- ・人があることを信じる思考の働きは、それを信じていると認識する働きとは違っており、この両者は互いにもう一方を伴わないことがたびたびある。

等しく受け入れられている幾つもの意見のうち、一番穏健なものを選ぶことにした理由は、あらゆる極端は悪いのが通例であり、穏健な意見は行うのにいつも一番都合がよく、恐らくは最善だと考えたからでした。

さらに、穏健な意見に従えば、やりそこねた場合にも、両極端の一方を選んだ後に、もう一方を取るべきだったことが判るよりも、真の道からの隔たりが少なくてすむと考えたのでした。

そして特に、自分の自由をいくらかでも削るような約束は、全て極端の部類へ入れ

ました。そうは言っても、法を認めなかった訳ではありません。デカルトが自分の自由に対する恐れとして感じていたのは、次のようなことだったのです。

自分は、この世にはいつも同一の状態で留まっているものは一つもないと認めている。特に自分自身、自分の判断を次第に完成こそすれ、決して悪くはしないと心に決めていたので、もしある時にある事を是認したために、後になってその事がひょっとして善でなくなるか、あるいは自分が善だと認めなくなった時にも、なおそれを善とせざるを得なかったとしたら、自分は良識に対して大きな過ちを犯すことになる。

- 2) 自分の行動には、できるだけ確固として変らぬ決心を持ち、一旦それと決めた以上は、一貫して従うこと

デカルトは、この規範に関わるヒントを、森の中で道に迷った旅人の適切な行動から得たと言っています。迷った旅人は、あちらこちらへとさまよい歩いてはいけなし、一ヶ所に留まってもいけないのです。いつも同じ方角に向かってできるだけまっすぐに歩き、最初にただ偶然にこの方角を決めたとしても、大した理由もなしにこの方角を変えてはならないのです。たとえこのやり方で、望む所へ正確に行き着くことがなくても、とにかくどこかへ行き着くことができるからです。

自分で決めたことを、自分で決めた方法論に従って実践することも同様だとデカルトは考えたのです。即ち、どれが最も真なる意見なのかを見分ける能力が我々に無いと思った時には、最も蓋然性の高い意見に従うべきだとしました。

また、どの意見に、より高い蓋然性があるのかが判らない時にも、どれかに決め、その後はその意見を、実践に関わる限り、疑わしいものとしてではなく、真実度が高い確かなものと受け止めなければならない、としました。

この行動規範で自分を律することによって、弱く動かされやすい精神、良いと思って無定見にやってしまったことを後になって悪かったとする精神、即ち、後悔と良心の不安の全てからデカルトは解放されたと語っています。

- 3) 運命よりもむしろ自分に打ち克つように、世界の秩序よりも自分の欲望を変えるように、常に努めること

この規範は、完全に我々の力の範囲内にあるものは我々の思想しかないと信じる

ように自分を習慣づけることでした。こう考えますと、我々の外にあるものについては、最善を尽くした上でも成功しないものは全て、我々にとっては絶対的に不可能だということになります。自分の手に入らないものを一切望まず、そのような自分を満足させるには、この規範で充分だとデカルトは思ったのです。

我々の意志はもともと、知性が何らかの仕方で可能だと提示することだけを望むものだと考えていたデカルトにとっては、このように思うのは当然のことだったのでしょう。彼は例えとして次のようなことを上げています。

- ・ 中国やメキシコの王国が自分の所有でないことを残念に思うことはない。
- ・ ダイヤモンドのように腐らない物質でできた体や、鳥のように飛べる翼を持ちたいと望むことはない。

つまり、いくら良いものでも、我々の外にあるものは全て等しく自らの力から遠く及ばないとみなせば、生まれつきによるような良きものがないからといって、自分の過ちで失ったのでなければ、それを残念とは思わなくなる、という訳です。

これは「必然を徳とする」ということなのですが、万事をそういう角度から眺める習慣がつくまでには、長い修練とたびたび反復される省察が必要なことは、デカルトも認めていました。

そして、昔、運命の支配から逃れ、数々の苦しみや貧しさにもかかわらず、神々と至福を競うことができた哲学者たちの秘訣も、主にこの点にあったと思うと語っています。

哲学者たちは、自然が予め自分に限界を定めているかどうかを常に考察し、自分の力の範囲内にあるものは思想だけであることを完全に納得していました。このことが他の物事に対するあらゆる執着から脱することを可能にしたのです。

その上、彼らは自分の思想を絶対的に自由に統御していましたから、自然と運命からいかに多くの恵みを受けていても自分の望む全てを統御できない人々よりも、自らをはるかに豊かで力に満ち、自由で幸福だと考えていたのです。

- 4) この世界で人々が携わっている様々な仕事を一通り見直して、最善のものを選び出すよう心掛けること

デカルトは、他人の仕事については何も言うつもりはありませんでした。自分

自身がやっていること、即ち、全生涯をかけて自分の理性を培い、自ら課した方法に従って、できる限り真理の認識に前進していくことを続けていくのが一番良いと考えていました。

この方法によってデカルトは、自分には十分に重要だと思われるが他人には一般に知られていない何らかの真理を日々発見していきました。こうしたことを通して得た満足は彼の精神を完全に満たしていました。

前に述べた3つの規範も、自分を教育し続けていこうとする彼の意図に基づいて設定されたものに他なりません。自分自身の判断力を用いて取り上げた他人の意見に満足することができたのも、その意見に従って安心して進むことができたのも、適切な行動を取り最善を尽くすためにできる限り適切な判断をすることができたのも、全てこの3つの規範に則ったゆえのことでした。

つまり、あらゆる美德とともに私たちの手に入り得る他の全ての善も獲得するためには、できる限りよく判断すれば充分だと、デカルトは言っています。この判断が、最善のものを選び出すことになるのです。

デカルトはこれらの規範をこのように確かめ、自分の信念の中で常に第一であった信仰の真理と合わせてひとまず脇に置いて保持し、その後自分の意見の残り全部を自由に捨て去ることができると判断したのでした。

そしてこの想いを達成するために、これまでのこと全てを考えた炉部屋に居続けるより、多くの人々と交流するほうがよいと考え、彼は再び旅に出ました。1620年3月、24歳を迎える頃のことでした。その後まる9年の間、世界で演じられるあらゆる芝居の中で、彼は役者よりむしろ観客になることに努め、あちこちと巡り歩いたのです。

この旅の間に彼は、多くの事柄に関して、疑わしい点や誤りやすい点につき一つ一つ反省を加えながら、自分の精神に忍び込んでいたあらゆる誤謬を根絶していきました。こうしたことを進めながらも彼は、ただ疑うためにだけ疑い、常に非決定であろうとする懷疑論者を真似た訳ではありません。むしろ逆で、自らの力で確信を得ること、そして曖昧な物事や事象を取り除いて、確固たる物事や事象を見つけ出すことを目指していたのでした。

デカルトはこうした思考と行動を通して、検討する命題の虚偽あるいは不確実性を、根拠薄弱な憶測ではなく、明晰で確かな推論によって明らかにしようと努めました。そして、どんなに疑わしい命題に遭遇しても、そこから十分に確実な何らかの結論を引き出すことに成功したのです。その中には、その命題が何も確実なものを含んでいないという

結論もありましたが、彼はこのプロセスは相当うまくいったと受け止めていました。

こうした思考と行動の中で彼が心がけていたことや、試行していたことがあります。そのうちの 하나가、基礎が確かでない判断した自分の意見を残らず破壊していく場合にも、色々な観察をし、多くの実験を集積し、それらを、後になってもっと確実な意見を打ち立てるのに役立てたことです。

そしてもう一つが、自分の定めた方法を使いこなす訓練を続けたことです。即ち、全てにわたって自分の思想を、自分の打ち立てた方法論の規則に従って導くように努めました。それに加えて、時々何時間かを割いて特に数学のむずかしい問題、さらには、数学の問題にほぼ似た形に直すことのできた他のいくつかの問題に、この方法を実際に適用しました。

それは、数学以外の学問、即ち、屈折光学や気象学の問題を、彼自身があまり堅固ではないと思っていた他の諸学問の原理、即ち、スコラ＝アリストテレスの質的自然学の原理から切り離すことによって行われました。デカルトの屈折光学や気象学の著書に説明されている多くの問題で、こうした彼の努力の痕跡を見ることができます。

他に何の仕事もない、こうした穏やかで邪念のない生活の中で、デカルトは自分の計画を追究し続け、ひたすら真理の認識に向かって前進を続けました。恐らく、ただ本を読んだり、学識者と付き合うだけの研究よりも、はるかに大きな成果が得られたことでしょう。

ところが、こうした生活の9年が過ぎても、学者たちの間で常に論争の対象となっていた諸難題について、デカルトは未だ何の結論にも到らず、当時の通常の哲学、即ち、スコラ哲学よりも確実な、どんな哲学の基礎も求めるには到っていませんでした。

そんな中で、デカルトの耳に飛び込んできたことがありました。それは、一部の人たちがデカルトが既にそれをやり遂げているという噂を広めているということです。以前にこうした計画を抱きながらも成功しなかった、多くの優れた人たちの実例を知っていたデカルトは、この計画には多大の困難があることを予想していました。

しかし、この噂を耳にしたことが、デカルトに思い切ってこの難問に着手する契機を与えることになったのでした。

何をもとにしてそんな噂が立ったのか、デカルトは考えてみました。彼が述べたことが何かの拠り所になっているとしたら、それは彼が、少しばかり学問した人が普通にやるよりも率直に、知らないことを知らないと告白したからに違いないと思い当りました。

そしてまた恐らく、彼が何か学説を一つでも誇示するよりは、他の人たちが確実だとして
いる多くのことについて、彼が疑う理由を示したからに違いないとも思い当ったのでした。
しかし彼は、実際の自分とは違うような受け入れ方をされたくない、という気持ちを強く
持っていましたので、噂に立った評判に値するようにあらゆる手段を尽くして努力すべき
だと考えました。

こうした願望を胸に抱き、知人のいそうな場所からは一切遠ざかって隠れ住もうと決心
したデカルトは、1628年9月にオランダに移りました。この国には、長く続いた
スペインからの独立戦争のおかげで、常備の軍隊は人々が平和の果実をいっそう安心して
享受できるためにだけ役立っている、と思えるような秩序がありました。

ここでは、大勢の国民が非常に活動的で、他人の仕事に興味を持つよりも自分の仕事に
気を配っているようでした。彼はそのような群衆の中で、きわめて繁華な都会にある
便利さを何一つ欠くことなしに、しかもできる限り人里離れた荒野にいるのと同じくらい、
孤独で隠れた生活を送ることができたのでした。